

編集後記

- 丁度新大学チャペルが完成した時期でもあり、紀要第4号の特集として「西南学院とチャペル」を取り上げた。本学院で建物としてのチャペルで一番古いものは、学院最古の建築物としてシンボリックな存在となっている現在の大学博物館である。この建物は博物館になる前は中高のチャペルとして使用されていた。大学博物館は、一般に公開されているが、その2階の講堂では神学部のチャペルが行われており、この建物のチャペルとしての伝統は守られている。現在、本学院には、百道浜に移転した中高のチャペルと昨年の4月にリニューアルした真新しい大学のチャペルの2つがあり、来春には小学校のチャペルも完成の予定である。各校に設置されているチャペルの存在を思うとき改めて建学の精神の座としてのチャペルが果たしている役割の重要さに気づかされる。
- 新大学チャペルについて、設計を担当したヴォーリズ設計事務所の中山氏に設計の専門家としての視点で分かりやすくご執筆いただいた。また、後藤先生にはチャペル建設委員として2003年の建設委員会発足から竣工に至るまでの経緯をまとめていただいた。2本とも貴重な学院史資料となるに違いない。また、村上前学長には、新大学チャペルの建設にあたって取り壊されたランキン・チャペルの思い出を執筆していただいた。52年に及ぶ歴史を持つチャペルに別れを告げるのは恠しい人も多かったと思われる。チャペルをめぐる座談会では、参加者5人の経歴や職場からその思いを語っていただいた。チャペルがそれぞれの学校に大きな影響を与えており、そこで話される言葉ひとつひとつが心の種となって、実になるまでには時間がかかるということが理解できた。
- 学院史を語る上で「戦争協力」というトピックも避けては通れない。松見先生の原稿は、戦時下のチャペルについて『西南（学院）新聞』を丁寧に読み込んで執筆されており、御真影や軍事教練など戦時体制に組み込まれて行く学院の様子が解説されている。また、相模先生は『関東学院百年史』を精読され「西南学院百年史」作成に際して心すべき貴重な提言をしてくださっている。お二人の寄稿は、それぞれ西南学院が戦争に関わった歴史についての優れた問題提起となっており、この学院の戦争協力の問題は引き続きこの紀要で取り上げていく予定である。
- 歴史には不思議なことや謎が多々ある。「だから歴史はおもしろい」という人もいるが、瀬戸先生が興味を持たれたドージャーの祈りの日付も学院史の謎かもしれない。誤記や勘違いがないように事実を1つずつ積み重ねる丁寧な調査をしなければならぬと気持ちを新たにさせられている。
- 今回、創立者ドージャーを研究対象にしている大学院生の堤さんからその研究の成果の一端を寄稿していただいた。堤さんの新たな視点からの今後の研究に期待したい。
- 時代の要請で開校した「西南学院商業学校」も短い年月でその役割を終えている。その第1期生である陶山さんは、かくしゃくとした語り口でとても80を越えた歳には見えなかった。歴史の証言者が年々減っていく中で短命な学校は埋もれてしまう恐れがあったが、陶山さんの貴重な話を収録することができ感謝であった。
- この春、本学の卒業生には記念のアルバムとDVDが配布された。そのDVDには大学の歴史を取り上げたコーナーが入っており、学生が自分の大学の歴史に興味と関心を持っていることが分かる。本学でも「西南学院史講義」がこの4月からスタートした。幸い受講生も200人を超え、授業に対する期待の高さが窺える。この2つの出来事は、学院史の担当者にとって心強い支えであり、この紀要も学院史に関心や興味を持つきっかけとなれば幸いである。（世）